

令和2年度
入学試験問題

第1回

国語

- 1 問題用紙は監督者かんとくしゃの指示があるまでは開いてはいけません。
- 2 開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入して下さい。
- 4 記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点くとうてんや符号ふごうは一字として数えるものとします。
- 5 問題は1ページから17ページまであります。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

森村学園中等部

対する、率直な賛辞だった。

「すぐのどこかで、いいところですね」

そんな感想を口にした私に、事業を手がけてきた日本人の男性はこう返した。

「本当にその通りです。でも、災害だったり、病気だったり、ちょっとしたことが起きただけで、彼らの暮らしはたちまち、立ちゆかなくなる。この素朴な暮らしは、とても危ういものなんです」

私は、新しい出会いの高揚感だけにとらわれ、安易な言葉を口にしてしまったことを恥じた。

その時はそこまで頭が回らなかったが、当時の写真を改めて見返してみると、集まっていたのは男性ばかりだ。今回、バン格拉デシユの事情について改めて調べなおしてみると、これは女性が1人で買物にすら出られないというバン格拉デシユならではの事情も絡んでいたのだろうと思う。

*^{どろかい} 倒壊したラナプラザで犠牲になった人たちは、こうした農村から都市部の工場に働きに出ていた人たちだ。農村では、現金収入を得る機会はとても少ない。「次の世代の教育のために」。そんな思いが、彼女たちの支えになっている。

「Made in Bangladesh」。最近そんなタグが着いた洋服を、よく見かけるようになった。観光国ではないバン格拉デシユについて、日本ではイメージできる人は少ないだろうし、足を運んだことがあるという人も少ないだろう。この洋服を作った人が、どこで、どんな暮らしをしているのか。想像することが難しい世界に、私たちは生きている。

大量生産の商品は、顔の見える誰かが作った服に比べれば、価値が低いもののように扱われている。もしかしたら、生産に関わっている本人も、何万もある工程の一つを担っただけの商品に対する愛着は薄いのもかもしれない。生産にかかわる人たちも、消費する側も、「簡単に捨ててよい」という感覚になってしまう。

移り変わる流行に合わせて、服を簡単に取りかえられる生活は、私たちを豊かにしたのだろうか。

〈中略〉

いいものを、安く。それが、これまでの賢い消費者だった。

だが、その先にあったのは、不毛な価格競争だ。同じ品質で、同じ技術で作られる製品の価格を下げるには、働く人の賃金を削っていくしかない。同じ国内での競争が一定の水準に達すれば、次はより賃金の安い国へと発注される。ある国では仕事が失われ、別の国では過酷な労働環境に耐えながら働き続ける人たちがいる。

地球環境への負荷も大きい。資源には限りがあり、いつまでも潤沢に使えるわけではない。また、大量に捨てられるものをどう処理し、コストをどう負担するかも大きな問題だ。こうしたことから目を背けていけば、そのまま、私たち自身の住環境や、健康問題として跳ね返ってくる可能性がある。

いま、世界中でグローバル化に「No!」を突きつける人が増えているのは、経済が発展し、ものが売れて数字の上は「豊か」になっただけで、暮らしの中で実感できなくなり、こうしたシステムを続けていくことの限界を肌で感じているからだろう。

では、消費者として、私たちはどうしていけばいいのだろう。「買わない」という選択をすれば、それで解決するのだろうか。

〈中略〉

茨城大学の長田華子准教授は、「不買は幸福をもたらさない」と訴える。たしかに、バン格拉デシユの縫製工場には多くの問題がある。だが、だからといって私たちがそこで作られた服を買うことをやめてしまえば、彼女たちの労働環境が改善するどころか、工場への注文が減り、彼女たちの給与が下がるだけでなく、最悪の場合は仕事を失ってしまう可能性もあるからだ。

「私たちに問われているのは、これまで990円で売られていたジーンズの価格を、5円でもいいから値上げすることを受け入れられるかどうかなのです」

〈中略〉

グローバル化が進んだ時代のメリットの一つは、情報も手に入れやすくなったことだ。インターネットに言葉を打ち込むだけで、これまで知らなかった国々の現実のことも、知ることができる。試しに、「バン格拉デシユ アパレル」とグーグル検索してみると、NGOなどのサイトで、現地の人の暮らしのことや、労働環境について知ることができる。もう少し詳しく知りたいと思えば、スタディツアーなどの形で現地に行くこともできるだろう。さらに、私たちがどう向き合えばいいかについても、様々な提案がなされ、議論がされている。

技術の革新を人類にとってプラスのものにするか、マイナスのものにするかは、使う側の意識に左右される。一度に大量にものを作ることができる技術。作ったものを運ぶ輸送力。人やものをつなげるインターネットの力。人類の知恵によって生み出された技術をどう生かすかも、人類の知恵次第だ。

そのための一歩が、知ることだ。目の前にある「安い服」は、どうやって生み出されているのか。買われることもなく捨てられてしまう服は、その後どうなるのか。自分が知った後は、誰かに伝えてみるもいい。そこから、一緒に何かできることはないかと考えてみるもいい。知ろうとする人が一人増え、さらに変えようと一歩踏み出す。それが少しずつ増えれば、いまの方向性は変えられる、と信じることは、あまりに楽観的すぎるだろうか。

でも、そうすることでは、変えることはできない。大量廃棄社会の現実を変えられるのは、私たち一人ひとりなのだ。⁶ 「いいものを、安く」ではなく、「いいものを、適正な価格で」。それが、これからの賢い消費者の姿だ。

(仲村和代・藤田さつき『大量廃棄社会』より)

※ 問題作成の都合上、原文の表記を一部改めたり、文章の一部を省略したりしたところがあります。

(注) *グローバル……………世界的な規模であるさま。

* Bangladesh ……南アジアにある国。

* 倒壊したラナプラザ……………二〇一三年四月二四日、Bangladeshのシャバルで、八階建ての商業ビル「ラナプラザ」が崩壊した事故のこと。死者一二七人、負傷者二五〇〇人以上。このビルには縫製工場や銀行、商店などが入居していた。

* Made in Bangladesh ……Bangladesh製という意味。

* 潤沢……………ものが豊富にあること。

* NGO……………非政府組織。民間人や民間団体の作る組織のこと。

問一——①「東北地方の農村では古くから、『刺し子』と呼ばれる民芸がさかんだった」とありますが、「東北地方の農村」で「刺し子」が

「さかん」になったのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 厳しく、楽しみがない時代に、自分たちの手で丁寧^{ていねい}に針をすすめることが慰め^{なぐさ}だったから。

イ 貧しく、ものがない時代に、布を縫い合わせる^ぬことで丈夫^{じょうぶ}さや温かさ^ぬを保とうとしたから。

ウ 品物を繰り返し^{かえ}再利用する習慣があった時代に、刺繍^{ししゅう}を施^{ほどこ}して丁寧^{ていねい}に使えるように工夫^{くわふ}したから。

エ 人手はあったがゆとりのない時代に、民芸品として販売^{はんばい}することで収入を得ようとしたから。

問二——②「服も、食べ物も、自分たちの手で作り、消費^{しょうひ}されていた」とありますが、このような暮らしのことをこれ以降の本文中で

何と表現していますか。八字以内でぬき出しなさい。

問三~~~~~a「選ぶことができる側」と~~~~~b「選ぶことができない側」とありますが、この部分で前者が選ぶことができるものとは

何ですか。また、後者が選ぶことができないものとは何ですか。次からそれぞれ二つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 労働 イ 値段 ウ 学校 エ 家族 オ 商品 カ 給料

問四 —— ③ 「バングラデシユの農村を訪れた」とありますが、筆者は、ここでの体験からどのようなことを伝えようとしていますか。

その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 発展途上国では動物も人もどこかで素朴な暮らしをしていること
- イ 女性が差別され、一人で外出することができない国もあること
- ウ 平穩に見える日々の暮らしが、実は大変苦しいものであること
- エ 現地の人々が命がけで作る製品が、先進国では消費されないこと

問五 ～～～～x 「ある国」と～～～～y 「別の国」とありますが、これらの国々の経済状況について述べたものとして、**適当でない**ものを次

から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア どちらの国の生産者も、先進国主導の価格競争に巻き込まれたといえる。
- イ どちらの国でも労働者の賃金は削られる傾向がある。
- ウ 「ある国」に比べて「別の国」の方が労働賃金は高い。
- エ 「ある国」と「別の国」間の価格競争に勝利したのは「別の国」だといえる。

問六 —— ④ 「こうしたシステム」とありますが、そのシステムによって現在どのような状況になっていると筆者は考えていますか。

最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 大量生産と大量消費により経済を発展させているが、労働者や環境に負荷が大きくかかっている状況
- イ 物や人の交流が活発化したことで数字の上では豊かになっているが、実際には誰もが不幸になっている状況
- ウ 世界規模で物や人が行き交うようになった結果、自分の国を大切にしようとする考えが薄れている状況
- エ ごく限られた人が地球の資源を使い、発展途上国の人だけが住環境や健康に害を受けている状況

問七 —— ⑤ 「5円でもいいから値上げすることを受け入れられるか」とありますが、5円値上げしたことによってもたらされる利益を

どのように使ったらよいとあなたは考えますか。本文で述べられていることを参考にして答えなさい。

問八 —— ⑥ 「大量廃棄社会の現実を変えられるのは、私たち一人ひとりなのだ」とありますが、筆者は「私たち一人ひとり」が「大量

廃棄社会の現実を」改善するために、どうすべきだと述べていますか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問九

本文の構成の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 冒頭^{ぼうとう}では地方の生活様式と都会の生活様式の違い^{ちが}が具体例を用いて紹介^{しょうかい}され、次にそれを受ける形で都会の生活の問題点が提示されている。最後に地方と都会の良い部分を掛け合わせ^{かあ}るといふ考え方を提案している。
- イ 冒頭ではかつての生活様式を理想的な生活の例として提示し、次にそれと対比する形で現在の生活様式がかつてのものといかに異なるかが説明されている。最後に、かつての生活に戻る^{もど}くための方法が示されている。
- ウ 冒頭では現在の分業体制の良い部分について説明し、次にそれと比較^{ひかく}する形で分業体制の悪い部分が提示されている。最後に、その良い部分と悪い部分の両者を自覚することが必要であると提案している。
- エ 冒頭ではかつての生活様式と比較する形で現在の生活様式が紹介され、次に現在の生活様式の問題点が提示されている。最後に、それに対する解決の糸口が示されている。

二次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

小学5年生の「ぼく」は、4年生の時に転校したのを機に、それまで入っていた少年野球チームをやめて、こども将棋教室に通うようになる。

クリスマスプレゼントにビニール製の盤とプラスチック製の駒を買ってもらい、ぼくは冬休みのあいだもひたすら将棋を指した。将棋は、誰の指図も受けずに、自分が考えた手を指せる。勝つのも、負けるのも、100パーセント自分の責任だ。だからこそ、必死に考えて、相手の玉を詰ませたときは本当にうれしい。

朝霞こども将棋教室で、ぼくは連勝を続けた。3級から2級へ、2級から1級へと順調に昇級し、ついに今日の1局目に勝って初段になったのだが、山沢君に苦杯をなめさせられた。

正直に言って、いまのぼくの実力では、どうやっても山沢君に敵わないだろう。でも、つぎに対戦するときまでに少しでも力をつけて、山沢君を本気にさせたい。

朝霞こども将棋教室には、二段が山沢君を入れて3人、初段はぼくを入れて4人いる。2週間後の教室では対戦がなくても、そのつぎの教室で当たる可能性はかなりある。4週間で、どれだけのことができるのか。いや、つぎの教室で当たった場合でも、今日よりきわどい将棋にするために対策を練らなくてはならない。

〈中略〉

月曜日の朝がきて、ぼくはランドセルを背負って小学校にむかった。朝ごはんを食べているあいだもそうだったが、ぼくの頭は将棋のことについてばいだった。

(横歩取りで勝負してやる)

それが、ぼくの選んだ作戦だった。

〈中略〉

通学路を歩きながら、ぼくは頭のなかの将棋盤で横歩取りの対局を並べた。

「翔太、おはよう」

うしろから声をかけられて、ぼくは跳びあがった。

「そんなにびびるなよ。昼休み、サッカーしようぜ」

大熊悠斗君とは、4年生のときも一緒のクラスだった。正しくは、大熊君のいる4年1組にぼくが転入したのだ。クラブチームに所属して

いるだけあって、大熊君はたぶん学年で一番サッカーがうまい。それに、おじいさんが将棋好きで、小さいころに教えてもらったのだというので、ぼくにとっては将棋の話ができる唯一の友だちだった。今日も、さそってくれてうれしかったが、いまは全ての力を将棋にそそぎたい。「きのう将棋教室で負けた相手にリベンジしたいんだ」

「へえ、そうなんだ。で、どんなやつ？」

悠斗君にきかれて、小学2年生の男の子だと言うと、思いきり笑われた。

「ありえねえ。小5が小2に負けるなんて、ぜってえ、ありえねえ」

②「サッカーや野球じゃそうだろうけど、将棋ではそういうことがあるんだって」

ぼくが詳しく説明すると、悠斗君はまだ信じられないようだったが、一応納得してくれた。

「わかったよ。それじゃあ、その山沢ってやつをさっさとぶっ倒して、また昼休みにサッカーをしようぜ」

「ありがとう。がんばるよ」

そう答えたものの、いくら横歩取りの研究をしても、山沢君に勝てる保証はなかった。最新型の研究なら、タブレットでプロ同士の対局を見られる山沢君のほうが断然有利だ。将棋の戦法は日進月歩で、ひとりの棋士が有力な新手を考えつくと、すぐにみんなが研究して取り入れるのだという。

(でも、やるしかない)

ぼくは昼休みも教室に残り、頭のなかで横歩取りの研究をした。放課後は盤と駒をつかってプロ同士の対局を並べる。そして詰め将棋をたっぷり解く。

アパートの部屋で、ひとりで将棋をしていると、山沢君の顔が頭に浮かんだ。小学2年生なのに厚いレンズのメガネをかけて、肌の色は白く、手足も細い。きつと、サッカーも野球も、あまりうまくはないだろう。

ぼくが山沢君について知っているのは、その程度だった。どこの小学校なのかや、何歳で将棋を始めたのかも知らない。山沢君だって、ぼくのことは名前と学年しか知らないはずだ。

(同じ将棋教室に通っていても、ぼくたちはおたがいのことをほとんど知らずに対局しているんだ)

そのことに、ぼくは初めて気づいた。*ファルコンズのメンバーは全員同じ小学校だったし、どこに住んでいるのかも、きょうだい何人いるのかも知っていた。食べものの好き嫌いや、勉強がどのくらいできるのかも知っていた。土まみれになって練習し、試合に勝てばみんな喜び、負けてはみんな悔しがった。

でも、一対一で戦う将棋では、勝っても、喜び合うチームメイトがない。チームメイト同士で励まし合うこともない。将棋では、自分以外は全員が敵なのだ。

野球と将棋のちがいを考えているうちに、ぼくはさみしくなってきた。

(でも、山沢君がどのくらい強いかは、いやというほど知ってるぜ)

ぼくは山沢君との一局をくりかえし並べていた。おそらく、ぼくの指し手は全て読み筋にあったにちがいない。つまり、多少手強^{てごわ}くはあっても、負ける気はしなかったはずだ。

(見てろよ、山沢。今度は、おまえが泣く番だ)

ぼくは気合いを入れたが、ますますさみしくなってきた。

(自分以外は、全員が敵か)

頭のなかでつぶやくと、涙^{なみだ}がこぼれそうになった。

(将棋は、ある意味、野球よりきついよな)

③ ぼくは初めて将棋^{こわ}が怖くなった。

前回の将棋教室から2週間がたち、ぼくは自転車で公民館にむかった。

〈中略〉

公民館に着いて、こども将棋教室がおこなわれる103号室に入ると、ぼくは挨拶^{あいさつ}をした。

「こんにちは。お願いします」

気合いが入りすぎて、いつもより大きな声が出た。

「おつ、いい挨拶だね。みんなも、野崎^{のざき}君みたいにしっかり挨拶をしよう」

有賀先生が言ったのに、返事をした生徒はひとりもいなかった。先生も、困ったように頭をかいている。ファルコンズだったら、罰^{ばつ}として全員でベースランニングをさせられるところだ。

④ (将棋一辺倒^{いっぺんどう}じゃなくて、野球もやってよかったよな)

ぼくは航太^{*}君のおとうさんと田坂^{たなか}監督に胸のうちで感謝した。

朝霞^{*}こども将棋教室では、最初の30分はクラス別に講義がおこなわれる。ぼくは初段になったので、今日から山沢君たちと同じ、一番上のクラスだ。ところが、有段者で来ているのはぼくと山沢君だけだった。

「そうなんだ。みんな、かぜをひいたり、法事^{*}だったりだね」

講義のあとは、ぼくと山沢君が対戦し、2局目は有賀先生がぼくたち二人を相手に二面指しをするという。前にも、先生が3人の生徒と同時に対局するところを見たが、手を読む速^{おとろ}さに驚いた。プロが本気になったらどれほど強いのか、ぼくは想像もつかなかった。

「前回と同じ対局になってしまいうけど、それでもいいかな？ 先手は野崎君で
「はっ」

ぼくは自分を奮い立たせるように答えたが、山沢君は

A

 だった。

(よし。目にももの見せてやる)

ぼくは椅子いすにすわり、盤に駒を並べていった。

「おねがいします」

二人が同時に礼をした。山沢君が対局時計のボタンを押すと、ぼくはすぐに角道を開けた。山沢君もノータイムで角道を開けた。続いて、ぼくが飛車先の歩を突くと、山沢君は少し考えてから、同じく飛車先の歩を突いた。どうせまた振り飛車びしやでくると思っていたはずだから、居飛車*を選んだべくに合わせようとしているのだ。

(よし、そうこなくちゃな)

ぼくは飛車先の歩を突き、山沢君も飛車先の歩を突いた。ぼくが飛車先の歩を伸ばせば、山沢君も飛車先の歩を伸ばす。この流れなら、まずまちがいなく横歩取りになる。あとは、研究の成果と、自分の読みを信じて、一手一手を力強く指すのみ。

序盤じよばんから大駒を切り合う激しい展開で、80手を越こえると双方そうほうの玉が露出ろしゅつして、どこからでも王手がかかるようになった。しかし、どちらにも決め手がない。ぼくも山沢君もとくに持ち時間はつかいきり、ますます難しくなっていく局面を一手30秒以内で指し続ける。壁かべの時計に目をやる暇ひまなどないが、たぶん40分くらい経っているのではないだろうか。持ち時間が10分の将棋は30分あれば終わるから、ぼくはこんなに長い将棋を指したことはなかった。これでは有賀先生との2局目を指す時間がなくなってしまう。

「そのまま、最後まで指しなさい」

有賀先生が言っつて、そうこなくちゃと、ぼくは気合いが入った。かなり疲つかれていたが、絶対に負けるわけにはいかない。山沢君だつて、そう思っているはずだ。

(勝ちをあせるな。相手玉を詰つますことよりも、自玉が詰つまされないようにすることを第一に考えろ)

細心の注意ちゆういを払はらって指していくうちに、形勢がぼくに傾かたむいてきた。ただし、頭が疲れすぎていて、目がチカチカする。指がふるえて、駒をまっすぐにおけない。

「残念だけど、今日はここまでにしよう」

ぼくに手番がまわってきたところで、有賀先生が対局時計を止めた。

「もうすぐ3時だからね」

そう言われて壁の時計を見ると、短針は「3」を指し、長針が「12」にかかっている。

40分どころか、1時間半も対局していたのだ。

ぼくは盤面に視線を戻した。ぼくの玉はすでに相手陣に入っていて、詰ませられることはない。山沢君も入玉をねらっているが、10手あれば詰ませられそうな気がする。ただし手順がはつきり見えているわけではなかった。

「すごい勝負だったね。ぼくが将棋教室を始めてから一番の熱戦だった」

プロ五段の有賀先生から最高の賛辞をもらったが、ぼくは詰み筋を懸命に探し続けた。

「馬引きからの7手詰めだよ」

山沢君が B に言って、ぼくの馬を動かした。

「えっ?」

まさか山沢君が話しかけてくるとは思わなかったので、ぼくはうまく返事ができなかった。

「こうして、こうなって」

詰め将棋をするように、山沢君が盤上の駒を動かしていく。

「ほら、これで詰みだよ」

(なるほど、そのとおりだ)

頭のなかで答えながら、ぼくはあらためてメガネをかけた小学2年生の実力に感心していた。

〈中略〉

103号室に戻り、カバンを持って出入り口にむかうと、山沢君が立っていた。ぼくより20センチは小さくて、腕も脚もまるきり細いのに、負けん気の強そうな顔でこつちを見ている。

「つぎの対局は負けないよ。絶対に勝ってやる」

「うん、また指そう。そして、一緒に強くなろうよ」

ぼくが言うと、山沢君がメガネの奥の目をつりあげた。

「なに言ってるんだよ。将棋では、自分以外はみんな敵なんだ」

小学2年生らしいムキになった態度がおかしかったし、「自分以外はみんな敵だ」と、ぼくだって思っていた。

「たしかに対局中は敵だけど、盤を離れたら、同じ将棋教室に通うライバルでいいんじゃないかな。ぼくは初段になったばかりだから、三段になろうとしているきみをライバルっていうのは、おこがましいけど」

⑥ ぼくの心はずんでいた。個人競技である将棋にチームメイトはいないが、ライバルはきつといくらでもあらわれる。勝ったり負けたりを

くりかえしながら、一緒に強くなっていけばいい。

「そういえば、有賀先生のおとうさんが教えた大辻弓彦さんおつじゆみひこっていうひとが、関西の奨励会しょうれいかいでがんばっているんだってね。大辻さんが先にプロになって、きみとほくもプロになって、いつかプロ同士で対局できたら、すごいよね」

奨励会試験に合格するにはアマ四段の実力が必要とされる。それに試験では奨励会員との対局で五分以上の星をあげなければならない。合格して奨励会に入っても、四段⇨プロになれるのは20パーセント以下だという。

それがどれほど困難なことか、正直なところ、ぼくにはよくわかっていなかった。でも、それほど苦しい道でも、絶対にやりぬいてみせる。

「このあと、となりの図書館で棋譜きふをつけるんだ。今日の、引き分けだった対局の」
⑦
「このあと、となりの図書館で棋譜きふをつけるんだ。今日の、引き分けだった対局の」
ぼくが言うと、山沢君の表情がほんの少しやわらかくなった。

「それじゃあ、またね」

三つも年下のライバルに言うと、ぼくはかけ足で図書館にむかった。

(佐川光晴『駒音高く』より)

※ 問題作成の都合上、原文の表記を一部改めたり、文章の一部を省略したりしたところがあります。

(注) *玉たまを詰つませた……………将棋しょうぎで、王将おうしょうのことを「玉」といい、玉が敵の駒こまに攻められて逃げきれなくなり負けとなることを「詰み」という。

「玉を詰ませる」は、相手を負かすこと

*横歩取り……………将棋の戦法の一種

*詰め将棋……………将棋のルールを用いたパズルで、指し将棋の終盤力を磨くための練習問題でもある

*ファルコンズ……………「ぼく」が転校する前に所属していた野球チームの名称

*読み筋……………将棋で、これから相手がどういう手を打ち、どう展開していくかを予想したもの

*航太君のおとうさん……………「ぼく」が小学校四年生まで所属していたファルコンズのジュニアチームの監督

*振り飛車……………将棋の戦法の一種

*居飛車……………将棋の戦法の一種

*詰み筋……………将棋で、「詰み」にいたるまでの手順のこと

*馬引きからの7手詰め……………あと7手で「詰み」になる、その手順のこと

*奨励会……プロ棋士を目指す者が所属する研修機関。年一回の入会試験は難関で、合格するには、最低でもアマチュア四段の実力が必要といわれる

*棋譜……将棋で、互いの対局者が行った手を順番に記入した記録

問一

①「ぼくの頭は将棋のことでいっぱいだった」とありますが、このときの「ぼく」の説明として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア クリスマスに将棋セットを買ってもらった当初は、ただその楽しさに夢中だったが、山沢君に負けたのを機に、本気で将棋に取り組もうと思いついている。

イ 将棋教室で初段まで昇級して得意でいたところ、年下の山沢君について負けてしまい、その悔しさから次こそは見返してやろうとムキになっている。

ウ 将棋教室で順調に戦績を伸ばしてきたが、ついに二段の山沢君に負けてしまい、次の対戦では互角に戦えるだけの力をつけておきたいと思っている。

エ 将棋教室で順調に勝ち続けて、すっかり有頂天になっていたが、思いがけず山沢君に負けてしまい、勝負の世界の厳しさを身にしみて感じている。

問二

②「ぼくが詳しく説明すると、悠斗君はまだ信じられないようだったが、一応納得してくれた」とありますが、「ぼく」が説明し、悠斗君が納得したのは、どのようなことだと考えられますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア サッカーや野球とは異なり、将棋の世界では番狂わせがたびたび起こりうること

イ サッカーや野球などのスポーツと将棋とは、求められる能力が同じではないこと

ウ サッカーや野球では、体格や体力に優れた上級生が下級生よりも有利であること

エ サッカーや野球とは異なり、将棋では幼い頃から始めた者が断然有利であること

問三 ―― a 「日進月歩」、b 「おこがましい」の意味として、最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a 「日進月歩」

ア 急速に進歩する様子

イ 少しずつ着実に前進する様子

ウ めまぐるしく変わっていく様子

エ 情勢がよくなったり悪くなったりする様子

b 「おこがましい」

ア ふざけている

イ 礼儀をわきまえない

ウ 舞い上がっている

エ 差し出がましい

問四

―― ③ 「ぼくは初めて将棋が怖くなった」とありますが、「ぼく」が将棋を「初めて」怖いと思うようになったのは、なぜですか。その理由を述べた次の説明文の [1] ・ [2] に、それぞれ三十字以上四十字以内の言葉を入れなさい。(ぬき出しではなく、本文中の言葉を適宜用いて作文すること)

「将棋を始めた当初は、将棋は野球と違って、

[1]

と思っていたが、アパートの部屋で山沢

君のことを思い浮かべているうちに、自分たちがおたがいのことをほとんど知らずに対局しているのだと初めて気づき、

[2] と思うようになったから。」

問五

―― ④ 「(将棋)一辺倒じゃなくて、野球もやってよかったよな」とありますが、ここから読み取れる「ぼく」の心情の説明として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 元氣よく挨拶をするという、野球を通して身についた習慣のおかげで、他の生徒の前で褒められたことを誇らしく思っている。

イ 大きな声で挨拶をして褒められた自分とは対照的に、挨拶を返すこともできない将棋教室の生徒たちを見て、ふがいなく思っている。

ウ 挨拶を返さない他の生徒たちを見て、野球以外にも大切なことを教えてくれた野球チームのことを、改めてありがたく思っている。

エ 生徒たちが挨拶を返さなくても叱らない有賀先生を見て、厳しい指導で自分を鍛えてくれた野球チームのことを懐かしく思っている。

問六

A・B に入る言葉として、最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア うれしそう イ つまらなそう ウ 悲しそう エ 恥はずかしそう
 オ 悔くやしそう カ 気の毒にくそう キ 申し訳わけなさそう ク 誇ほこらしそう

問七

⑤ 「メガネをかけた小学2年生」とは山沢君のことですが、ここでは、なぜ、このように表現したのですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分と白熱した勝負をした相手が、小学2年生の幼い子供に過ぎなかったと改めて印象づけることで、その天才ぶりに「ぼく」がたじろいでいる様子を効果的に示すため。

イ あと少しで勝つことのできた相手が、改めて見れば幼さの残る年下の少年にすぎなかったと印象づけることで、「ぼく」の悔しさを効果的に示すため。

ウ 自分が読めなかった詰つみ筋すじをすでに読んでいた相手が、三つも年下であったことを明らかにすることで、「ぼく」が劣等感れつとうかんかられている様子を効果的に示すため。

エ 対局が終わってからも実力の差を見せつけてくれた相手が、自分よりも年下の少年であったことを改めて印象づけることで、「ぼく」の驚おどろきと賞賛しょうさんを効果的に示すため。

問八

⑥ 「ぼくの心はずんでいた」とありますが、このときの「ぼく」の心情の説明として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「自分以外はみんな敵なんだ」と、ムキになっている山沢君の態度は、まるで以前の自分の姿を見るようで、改めて思えば、そんなに深刻かんかくに考えかんがえ込こまずに、将棋を心から楽しめばいいのだと自分に言い聞かせている。

イ 「自分以外はみんな敵だ」と、以前は自分もムキになっていたが、山沢君にあと少しで勝てるところまで成長した自分を確信し、これからはお互いに対等につきあっているだろうと、気持ちの余裕よゆうが生まれている。

ウ 「自分以外はみんな敵だ」と思うときさびしかったが、山沢君との熱戦を経て、自分以外の相手をすべて敵と思うのではなく、ともに高め合うライバルだと思えばさびしくはないのだと気づいて、明るい気持ちになっている。

エ 「自分以外はみんな敵だ」と思い、一度は将棋が怖こわくなっていたが、山沢君の悔くやしがる姿を見て、怖いのは自分だけじゃないんだと気づき、ともに将棋の怖こわさを克服こくふくして、プロを目指す仲間としてがんばろうと思っている。

問九

——⑦「山沢君の表情がほんの少しやわらかくなった。」とありますが、これに対応する山沢君の態度について述べた三十字以内の一文を、これ以前の本文中に求め、最初と最後の五字をぬき出しなさい。

問十

本文の内容と表現の特徴の説明として適当でないものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 物語は「ぼく」を語り手としてつづられるが、「ぼく」の心のつぶやきが（ ）を用いて表現され、それが文中の所どころにさし込まれることで「ぼく」の心の動きがリアルに伝わってくる。

イ 物語は、将棋に打ち込む二人の少年を中心に進められるが、そこに、サッカーがうまくて快活な少年「大熊悠斗君」が登場することによって、物語の世界が奥行きのあるものになっている。

ウ 将棋教室に通う少年たちの無邪気な姿が、「有賀先生」というプロの目を通して客観的に描かれることで、将棋の世界の厳しさが将棋をよく知らない読者にも伝わってくるように描かれている。

エ 転校を機に、「ぼく」は野球をやめて、将棋に夢中になっていくのだが、同時に、「ぼく」は将棋を通じて、チームにいた頃には特に意識することもなかった、野球の一面を再認識していくことになる。

オ 山沢君との対戦を終えた直後の、「壁の時計を見ると、短針は『3』を指し、長針が『12』にかかっている」という表現からは、「ぼく」が対局に全神経を傾けていたことが伝わってくる。

カ 当初「ぼく」は、三つも年下のくせに生意気な態度をとる「山沢君」に対して反感を抱いていたが、ともに白熱した対局を戦ったことで反感は消え、ライバルとして認めるようになっていく。

三 次の①から⑧の——部のカタカナを漢字になおし、⑨から⑫の——部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① 海底タンサ船が静かに母船を離れた。
- ② 新製品のセンデンに力を入れる。
- ③ 湖をハイケイにして写真を撮った。
- ④ 問題の解決のためにクラスでトウギを重ねた。
- ⑤ 船のモケイを熱心に眺める。
- ⑥ 屋根に積もった雪を取りノゾいた。
- ⑦ 真っ白い布を青くソめた。
- ⑧ 音楽会でフルートをエンソウする。
- ⑨ 富士山の頂を目指した。
- ⑩ 豚の臓物を使ってソーセージを作る。
- ⑪ 干害のため米の収穫量が減少する
- ⑫ 樹氷は限られた条件の下で形成される。